

- 1 血清 IgG、IgA、IgM が全て低下するのはどれか。
 - a 肝硬変
 - b IgA腎症
 - c 全身性エリテマトーデス
 - d 原発性マクログロブリン血症
 - e ベンスジョーンズ蛋白 (BJP) 型多発性骨髄腫
- 2 心房細動を伴う心原性脳塞栓の再発予防薬はどれか。
 - a アスピリン
 - b ワルファリン
 - c シロスタゾール
 - d クロピドグレル
 - e ジピリダモール
- 3 正しいのはどれか。
 - a 足関節-上腕血圧比 (ABI, ankle-brachial index) 算出で用いる血圧値は収縮期血圧である。
 - b 動脈硬化度が強くなると脈波伝搬速度 (Pulse Wave Velocity) は遅くなる。
 - c 間欠性跛行を自覚する側の下肢の足関節-上腕血圧比 (ABI, ankle-brachial index) は1.3以上である。
 - d 末梢動脈疾患に対する降圧利尿薬は禁忌である。
 - e 連続歩行可能距離 (m) は脊柱管狭窄症との鑑別に有用である。
- 4 誤っているのはどれか。
 - a Barrett上皮は腺癌の発生源とされている。
 - b 胸部上部進行食道癌では気管支に浸潤することが多い。
 - c 癌浸潤が粘膜下層までにとどまるものを食道表在癌という。
 - d 表在型食道癌の診断にインジゴカルミン染色法は有用な方法である。
 - e 癌浸潤が粘膜層にとどまり、リンパ節転移のない食道癌を早期食道癌という。
- 5 感染性心内膜炎について正しいのはどれか。
 - a 高頻度で膠原病に合併する。
 - b 初発症状として心不全が多い。
 - c 上気道炎症状に続発することが多い。
 - d 黄色ブドウ球菌が原因の場合急性の経過をとる。
 - e 心断層超音波での疣贅所見は診断に必須である。
- 6 高カリウム血症をきたす疾患はどれか。
 - a 慢性下痢
 - b 習慣性嘔吐症
 - c 腎血管性高血圧症
 - d 副腎皮質機能低下症
 - e 原発性アルドステロン症
- 7 薬剤と副作用の組み合わせで誤っているのはどれか。
 - a インスリン———皮下硬結
 - b ビグアナイド薬———乳酸アシドーシス
 - c チアゾリジン誘導体———浮腫
 - d スルフォニル尿素薬———遷延性低血糖
 - e α -グルコシダーゼ阻害薬 ———不整脈
- 8 抗結核薬と副作用の組合せで正しいのはどれか。
 - a イソニアジド———末梢神経炎
 - b リファンピシン———高尿酸血症
 - c ピラジナミド———第Ⅷ脳神経障害
 - d ストレプトマイシン———球後視神経炎
 - e エタンプトール———肝機能障害
- 9 直腸、肛門疾患の診察に用いられる体位はどれか。2つ選べ。
 - a 仰臥位
 - b 碎石位
 - c 左側臥位
 - d Trendelenburg位
 - e Jack knife position
- 10 腎症を合併しやすい疾患はどれか。2つ選べ。
 - a 川崎病
 - b 強皮症
 - c 皮膚筋炎
 - d シェーグレン症候群
 - e 全身性エリテマトーデス

11 排卵期におこなう不妊検査はどれか。2つ選べ。

- a 卵管通気法
- b Huhner試験
- c 頸管粘液検査
- d 子宮内膜日付診
- e 結核菌培養

12 中毒と原因物質の組み合わせで誤っているのはどれか。

- a トルエン—————気管支喘息
- b メチルアルコール—————失 明
- c トリクロロエチレン—————肝障害
- d ノルマルヘキサン—————多発性神経炎
- e クロム—————鼻中隔穿孔

13 唾石症について正しいのはどれか。

- a 舌下腺に好発する。
- b エックス線透過性のものが多い。
- c 摂食時に疼痛が増強する。
- d 腺内唾石は口内法で摘出する。
- e シェーグレン症候群に合併しやすい。

14 尿閉を来す疾患はどれか。

- a 膀胱炎
- b 腎盂腎炎
- c 尿管腫瘍
- d 慢性腎不全
- e 前立腺肥大症

15 結核菌と非結核性抗酸菌 (*Mycobacterium avium* complex) について正しい組み合わせはどれか。

- | | 結核菌 | 非結核性抗酸菌 |
|---|---------------|-------------|
| a | グラム染色————— | 不定性—————陽 性 |
| b | 発育速度————— | 遅 い—————速 い |
| c | ナイアシン産生————— | な し—————あ り |
| d | ツベリクリン反応————— | 陽 性—————陰 性 |
| e | ヒト・ヒト感染————— | あ り—————な し |

16 縦隔腫瘍と好発部位の正しい組み合わせはどれか。

- a 縦隔内甲状腺腫—————後縦隔
- b 神経原性腫瘍—————前縦隔
- c 悪性リンパ腫—————中縦隔
- d 奇形腫—————中縦隔
- e 胸腺腫—————後縦隔

17 脊髄障害の高位診断で髄節障害レベルを判定するのに有用なのはどれか。

- a 腱反射
- b 筋緊張
- c 運動失調
- d 深部感覚
- e Babinski反射

18 以下の身体所見を有する症例が胸骨左縁第4肋間にLevine 3/6度の収縮期・拡張期雑音を呈する場合、心雑音の原因と考えられる診断はどれか。

身体所見：身長180cm、体重56kg。四肢は細長く（両腕側方挙上時の両手指先端距離184cm）、口蓋が高い。

- a 僧帽弁狭窄症
- b 肺動脈狭窄症
- c 僧帽弁閉鎖不全症
- d 三尖弁閉鎖不全症
- e 大動脈弁閉鎖不全症

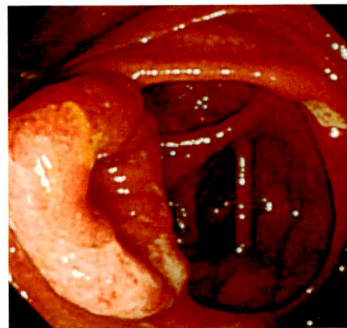
19 生下時に気管支拡張が認められるのはどれか。

- a 嚢胞性線維症
- b 気管支軟骨欠損症
- c びまん性汎細気管支炎
- d Kartagener症候群
- e 先天性免疫グロブリン欠損症

20 染色体異常によるのはどれか。3つ選べ。

- a Down症候群
- b Turner症候群
- c Kallmann症候群
- d Prader-Willi症候群
- e Rubinstein-Taybi症候群

- 21 43歳の男性。昨日から腹痛、嘔気、水様性下痢が出現し、38℃台の発熱も認めたため来院した。来院時体温38.2℃。腹部：平坦、軟。下腹部に圧痛を認める。血液所見：白血球12,500、Hb 15.2 g/dl、赤沈 35 mm/1時間。CRP 2.8 mg/dl。3日前に会社帰りに同僚と焼き鳥を食べていた。薬物使用歴なし、海外渡航歴なし。内視鏡写真を示す。



内視鏡写真

- この疾患について正しいのはどれか。
- a 毒素型である。
 - b 接触感染を起こす。
 - c 三類感染症である。
 - d リンパ節腫大がみられる。
 - e マクロライド系抗菌薬が第一選択である。

- 22 54歳の男性。元来、大酒家で、アルコール性肝硬変のために3年前から内科へ通院していた。しかし、酒量を減らすことができず、黄疸、下腿浮腫著明となり、内科病棟へ入院となった。入院前日まで飲酒しており、入院時には、発汗、手指振戦を認めていた。入院2日目の午後11時頃より、「病室の壁に虫がいっぱいいるから取ってくれ」「ほら、床にもいるだろ。そこにいるって」と興奮が強くなり、怒鳴り出した。

診断はどれか。

- a 病的酩酊
- b 振戦せん妄
- c Wernicke脳症
- d Korsakoff症候群
- e アルコール幻覚症

- 23 52歳の女性。下腹部痛を主訴に来院した。

現病歴：1か月前から時々下腹部痛が出現していた。数日前から排便はあるが少量で、腹部膨満感も認められるようになった。今日になり間欠的に激しい腹痛を訴えるとともに黄褐色の排便を多量に嘔吐したため緊急入院となった。

既往歴：12歳のとき急性虫垂炎の穿孔による腹膜炎で2週間入院した。

現 症：身長156cm、体重52kg。体温36.2℃。脈拍96/分、整。血圧120/68mmHg。

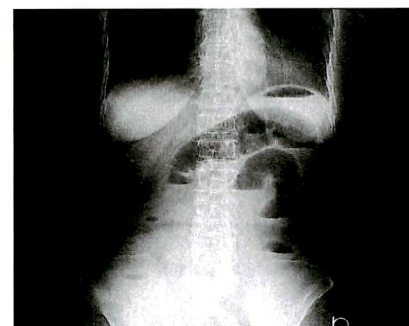
検査所見：血液所見：白血球6,000、赤血球420万、Hb 12.8 g/dl、Ht 38%、血小板25万。

血液生化学所見：総蛋白7.5g/dl、AST 22 IU/l、ALT 20 IU/l、ALP 120 IU/l（基準 115～359）、 γ -GTP 12 IU/l（基準 30以下）、CK 25 IU/l（基準 32～180）、尿素窒素12mg/dl、クレアチニン1.1mg/dl。免疫学所見：CRP 5.2 mg/dl。

腹部エックス線写真を示す。

直ちに行うべき処置はどれか。

- a 浣腸
- b 下剤投与
- c 緊急手術
- d 腸蠕動剤の投与
- e イレウス管の挿入



腹部エックス線写真



腹部エックス線写真

24 10か月の男児。1週間前から38℃以上の発熱が続いた。4日前から全身に紅色斑状の発疹が出現した。近医で感染症を疑われ抗菌薬の投与を受けたが、症状の改善をみず、昨日から手掌が赤く、腫脹が見られたため来院した。眼球結膜の充血、口唇の発赤、亀裂およびいちご舌を認める。頸部に0.5～1cmのリンパ節を数個触知する。胸部聴診は異常を認めない。

正しいのはどれか。

- a 女児が男児よりも多い。
- b 冠動脈造影は不要である。
- c 10歳前後の学童におこりやすい。
- d 末梢動脈には障害を残すことがない。
- e 指先の膜様落屑は治療の経過をみる上で有用である。

25 62歳の男性。健康診断で胸部異常陰影を指摘されて来院した。喫煙は40本/日で40年間続いている。胸部CTで右下葉に長径4.5cmの原発巣と明らかな右肺門リンパ節腫脹と左上葉に長径2.0cmの転移巣を認める。そのほかには転移巣は認めない。経気管支肺生検で腺癌と診断された。performance statusは0で、肝機能、腎機能などの臓器機能は保たれている。

正しい治療法はどれか。

- a 手術
- b 手術＋術後補助化学療法
- c 放射線療法
- d 化学放射線療法
- e 化学療法

26 32歳の女性。昨年までの健康診断では異常を指摘されたことはなかったが、今年初めて高血圧を指摘され一般内科医を受診した。

身長151cm、体重40kg。血圧158/94mmHg、脈拍76/分、整。意識清明。心雑音なし。呼吸音に異常なし。腹部：臍右側に血管雑音を聴取する、腫瘍触知なし、

胸部レントゲン検査に異常所見なし。心電図所見で平低T波あり。

血算：白血球 7,900、Hb 10.9 g/dl、Ht 33.9%、血小板 28.7万、赤沈 39mm/hr、生化学：ALT 28 IU/l、AST 21 IU/l、LDH 382 IU/l（基準176～353）、CK 117 IU/l（基準10～40）、尿素窒素 22 mg/dl、クレアチニン 0.8 mg/dl、Na 135 mEq/l、K 3.9 mEq/l、Cl 102 mEq/l、CRP 12.1mg/dl。

生活習慣改善を開始したが、3か月後でも血圧150/84mmHgであったため降圧薬（X）が処方された。その3日後より急激にふらつき感や下腿浮腫が増強したため専門医を受診した。受診時血圧80/62mmHg。脈拍70/分、整。血液検査で尿素窒素 70 mg/dl、クレアチニン 3.8 mg/dl、K 5.6 mEq/lを示し緊急入院となった。

正しいのはどれか。

- a 初期治療としてステロイド投与は禁忌である。
- b 一般内科受診時の血漿レニン活性値は低下していたと考えられる。
- c ブドウ膜炎による眼症状を併発することはない。
- d 内服した降圧薬（X）はカルシウム拮抗薬（ニフェジピン）と考えられる。
- e 直ちに腹部血管造影検査で診断を確定する。

27 35歳の男性。3か月前より左右の頸部の腫瘍に気づき、増大傾向があったため、受診した。

1か月前より盗汗をみとめている。

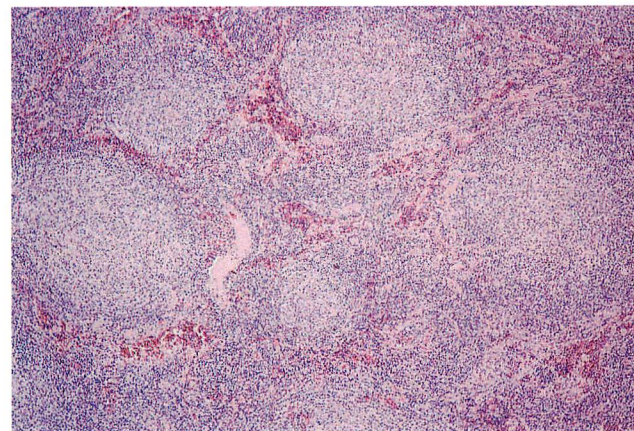
血液所見：白血球 7,200、赤血球 410万、Hb 13.4 g/dl、Ht 42%、血小板18万。

血液生化学所見：総蛋白7.8 g/dl、アルブミン4.2g/dl、AST 32 IU/l、ALT 24 IU/l、LDH 472 IU/l（基準140～220）、CRP 2.6mg/dl、可溶性 IL-2 受容体 1,200 U/ml（基準145～519）。

頸部腫瘍生検H-E染色標本を示す。濾胞様構造部位の細胞は、CD20陽性、CD10陽性、CD3陰性、bcl-2陽性であった。リツキシマブ併用化学療法を行うことにした。

治療方針および注意点に関して適切なのはどれか。3つ選べ。

- a 肝炎ウイルス検査が必要である。
- b 心エコーによる心機能評価が必要である。
- c リツキシマブ併用CHOP療法が標準である。
- d G-CSFは腫瘍量を増加させるので使用しない。
- e 反応性リンパ節炎が除外できないので、経過観察でよい。



頸部腫瘍生検H-E染色標本

28 28歳の女性。8年前から月経時に脈打つような頭痛があり、市販薬を服用していた。5日前から頭全体の脈打つような頭痛が出現。動く痛みは増強し、悪心、嘔吐を伴っていた。鎮痛薬を服用したが改善せず、発熱も出現したため当院を受診した。身長168cm、体重56kg。体温38.1℃。脈拍110/分、血圧120/60 mmHg。一般身体所見上異常なし。一般採血でも異常所見は認めなかった。

適切な対応はどれか。2つ選べ。

- a 腰椎穿刺を行う。
- b 脳波検査を行う。
- c 抗菌薬を投与する。
- d 頭部CTを施行する。
- e スマトリプタンを皮下注射する。

29 24歳の女性。1週間前から口渇があり、水をよく飲むようになった。3～4日前から食欲不振と悪心があり、昨朝、近医を受診した。点滴を受け帰宅したが、同日の夕方、少量の食物残渣を数回嘔吐し、その後しだいに意識低下したため搬送された。

入院時所見 身長164cm、体重51kg。血圧100/64mmHg。脈拍110/分、整。呼吸数10回/分。意識は傾眠。皮膚、口腔粘膜は乾燥。貧血、黄疸はなし。胸腹部に異常なし。

尿所見：糖4+、蛋白(－)、ケトン3+

血液所見：白血球 12,000、ヘモグロビン15.2g/dl、ヘマトクリット50%。血糖値824mg/dl、BUN 62 mg/dl、Cr 4.2 mg/dl、Na 134 mEq/l、K 4.2 mEq/l、Ca 9.6mg/dl、IP 3.2mg/dl。

動脈血液ガスpH 7.10、HCO₃ 8 mEq/l、PO₂ 92 torr。

まず行う治療はどれか。2つ選べ。

- a 血液透析
- b 生理食塩水補液
- c 重炭酸イオン静脈投与
- d インスリン持続静脈投与
- e グルコン酸カルシウム静脈投与

30 66歳の男性。腹部膨満感を主訴に来院した。20年前から慢性肝炎の診断で近医に通院中。3週間前から下腹部が張る感じがあり、この1か月で体重が5kg増加した。意識は清明。身長166cm、体重60kg、体温36.7℃。脈拍76/分、整。血圧146/60mmHg。眼球結膜に黄染を認める。手掌紅斑と胸部のクモ状血管腫とを認める。腹部は全体的に膨隆し、緊満している。肝は触知せず、脾濁音界は拡大し、脾辺縁を触知する。下肢に浮腫を認める。

検査所見：尿所見：蛋白(－)、糖(－)、ウロビリノゲン2+、ビリルビン1+、潜血(－)。

血液所見：赤血球：380万、Hb 11.9 g/dl、Ht 37%、白血球3,500、血小板6万、プロトロンビン時間67% (基準80～120)。

血液生化学所見：空腹時血糖92mg/dl、総蛋白5.3 g/dl、アルブミン2.1 g/dl、 γ -グロブリン35.5%、尿素窒素8.3mg/dl、クレアチニン0.7mg/dl、アンモニア 42 μ g/dl (基準18～48)、総コレステロール130mg/dl、総ビリルビン4.7mg/dl、直接ビリルビン2.9mg/dl、AST89単位、ALT45単位、ALP366単位 (基準260以下)、 γ -GTP392単位 (基準8～50)、Na136 mEq/l、K 3.9 mEq/l、Cl 103 mEq/l。

免疫学所見：CRP 0.1 mg/dl、HBs抗原陽性、AFP 16 ng/ml (基準20以下)。

腹部超音波検査では大量の腹水の貯留を認め、肝辺縁は鈍化し、表面は不整、肝実質も不均一である。結節像は認めない。

最も考えられる腹水の性状はどれか。

- a 混濁
- b 血性
- c 乳び様
- d ゼリー状
- e 淡黄色透明

31 53歳の女性。呼吸困難を主訴に来院した。6月初旬より微熱と乾性咳嗽を主訴に他院を受診、異型肺炎の診断で入院。抗菌薬を投与され軽快し退院した。しかし、退院2日後より、再び微熱と咳嗽を認めた。その後呼吸困難も伴うようになり精査加療目的にて紹介受診。喫煙歴なし。住居は築30年の木造家屋。ペットは飼育していない。

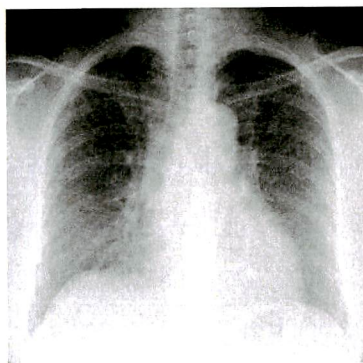
意識清明。体温37.2℃。呼吸数22/分。脈拍112/分、整。血圧116/72mmHg。両側下肺野背部で fine crackles を聴取する。血液所見：白血球 11,200 (桿状核好中球11%、分葉核好中球75%、好酸球1%、単球2%、リンパ球11%)、CRP 8.2mg/dℓ。

胸部エックス線写真と胸部単純CTを示す。

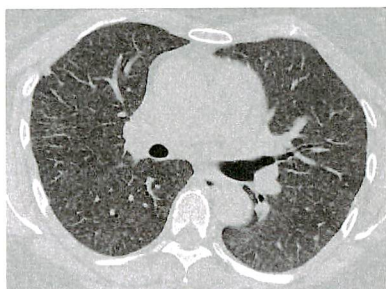
診断確定のため気管支内視鏡検査を行なうことになった。

予測される結果はどれか。2つ選べ。

- a 気管支肺胞洗浄液で総細胞数の増加
- b 気管支肺胞洗浄液で好酸球の増加
- c 気管支肺胞洗浄液でCD 4/CD 8 が1.0以下
- d 経気管支肺生検でクレオラ体
- e 経気管支肺生検で非乾酪性類上皮肉芽腫



胸部エックス線写真



胸部単純CT

32 45歳の男性。マラソン完走後に乏尿と脱力を主訴に搬入された。意識清明。体温37.2℃。脈拍96/分、不整。血圧130/70mmHg。両側下肢の腓腹筋に自発痛と把握痛を認めた。尿所見：蛋白(+)、潜血3+、糖(-)。血液生化学所見：総蛋白8.5g/dℓ、尿素窒素60mg/dℓ、クレアチニン3.2mg/dℓ、CK 5,000 IU/ℓ (基準60~247)、Na 132 mEq/ℓ、K 7.0 mEq/ℓ、Cl 103 mEq/ℓ、Ca 8.5 mg/dℓ、P 6.5 mg/dℓ。動脈血ガス分析 (自発呼吸、room air) :pH 7.30、PaO₂ 98 Torr、PaCO₂ 32 Torr、HCO₃⁻ 18 mEq/ℓ

直ちに行うのはどれか。

- a 血液透析
- b 維持液輸液
- c ループ利尿薬投与
- d グルコン酸カルシウム投与
- e 重炭酸ナトリウム投与

33 1歳の男児。鼻出血が止まらないため受診した。採血後に皮下出血ができた。(写真：右手背の皮下血腫を認める)。祖父も鼻出血が止まりにくく、右膝関節を人工関節に置換している。

考えられるのはどれか。

- a 血友病A
- b 血小板無力症
- c 溶血性尿毒症症候群 (HUS)
- d Kasabach-Merritt症候群
- e 特発性血小板減少性紫斑病 (ITP)



右手背の写真

34 51歳の女性。10年来関節リウマチにて、副腎皮質ステロイドおよび非ステロイド抗炎症薬と注射金製剤による治療を受けていた。3年前より注射金製剤を中止し、サラゾスルファピリジンの経口投与に切り換えたが関節炎の活動性は十分に抑えられなかった。1年前より蛋白尿が出現するようになり、念のためサラゾスルファピリジンを中止したが、その後も蛋白尿が消失せず、下腿浮腫出現。さらに3か月前より頑固な下痢が続くようになり、精査のため来院した。両手指の変形を認め、両手、足、膝関節の腫脹と圧痛を認めた。尿所見：蛋白尿 3g/日。血清生化学所見：尿素窒素40mg/dℓ、クレアチニン1.5mg/dℓ、血沈108mm/1時間、RAPA 2,580倍 (基準40倍未満)、CRP 7.8mg/dℓ (基準0.3倍未満)。胸部エックス線写真では軽度の心拡大を認めた。

診断確定のために最も有用な検査はどれか。

- a 注腸造影
- b 骨髓穿刺
- c 抗核抗体
- d 血清補体価
- e 胃十二指腸粘膜生検

35 28歳の1回経産婦。外来健診で胎児発育の異常を指摘され妊娠33週に入院となった。妊娠週数は初期の頭殿長で確認されており誤りはなかった。

妊娠・分娩歴：第一児目を妊娠38週に2,000gで出産

生活歴：喫煙20本/日、5年間

現 症：身長160cm、体重60kg（非妊時55kg）、腹囲70cm、子宮底長25cm、血圧 120/70 mmHg

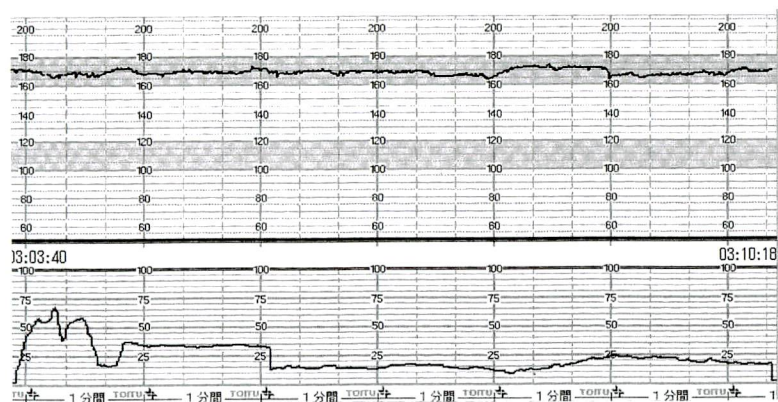
内診所見：先進部は児頭で子宮口は閉鎖し破水は認められない。

血液尿検査所見：特記すべき異常無し。

超音波検査所見：胎児推定体重1,000g、胎児奇形は認められない。入院時の胎児心拍数図を示す。

考えられるのはどれか。

- a 羊水過多
- b 胎動の増加
- c 頭囲/腹囲比の低値
- d 胎児呼吸様運動の消失
- e 臍帯動脈RI（resistance index）の低下



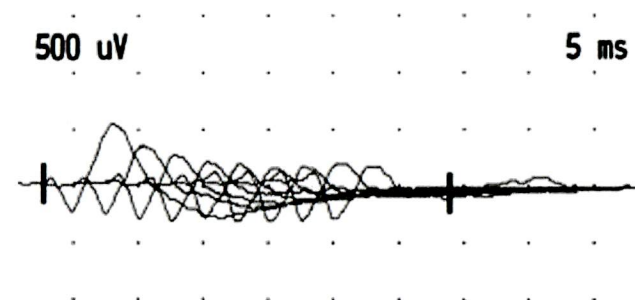
入院時の胎児心拍数図

36 25歳の女性。数か月前から運転中に目がかすむことが時々あった。1週間前から夕方になるとものがグブってみえるようになった。昨日から右脛が下がるようになったため来院した。他に自覚症状はなし。初診時神経所見と一般身体所見は異常なく、現在は眼瞼下垂、複視もみられない。他神経所見に異常なし。血液検査では甲状腺機能を含め異常はないが、自己抗体等の特殊検査の結果はまだ出ていない。

この患者の神経電気生理検査を示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 重症筋無力症
- b 筋強直性ジストロフィー
- c 多発性筋炎
- d Lambert-Eaton症候群
- e Guillain-Barre症候群



神経電気生理検査

37 1歳の男児。在胎37週、出生体重2,992gで出生した。発達には異常を認めない。

生後7か月頃より偏食傾向あり、500mlのアクアライトを1日3本～5本飲水していた。

イオン飲料、うどん、粥などを摂取するも、食事をするたびに嘔吐があるため急患センターを受診。次第に意識障害と多呼吸を認め、血液検査で、Na 119 mEq/ℓ、血糖 42mg/dℓ、血清乳酸 35mg/dℓ（動脈血）（基準 3～17）、血液ガスでpH 7.30、PCO₂ 10 Torr、HCO₃ 5 mEq/ℓ、BE -16.9を認めたため当院転院となった。

検査で必要性のないのはどれか。

- a 血漿浸透圧
- b 血清ケトン体
- c 尿中Na排泄量
- d 血清ビタミンD値
- e 血清ビタミンB₁₂値

38 4か月の乳児。生後1か月頃から臍が膨れ出したため、母親が心配し来院した。哺乳は良好で、嘔吐はない。排便も順調である。

来院時の臍の所見を示す。



来院時の臍の所見

この疾患について正しいのはどれか。

- a 生直後から発症する。
- b 嵌頓することが多い。
- c 心疾患の合併率が高い。
- d 自然治癒することが多い。
- e 肝臓が脱出することがある。

39 62歳の女性。1週間前から右眼の視力障害を主訴に来院した。視力は右眼0.1 (0.1×1.0D) 左眼0.8 (1.2×+1.0D)、眼圧は正常範囲内であった。右眼の視神経乳頭は蒼白浮腫を来し、視野検査にて右眼は下半盲を認めた。

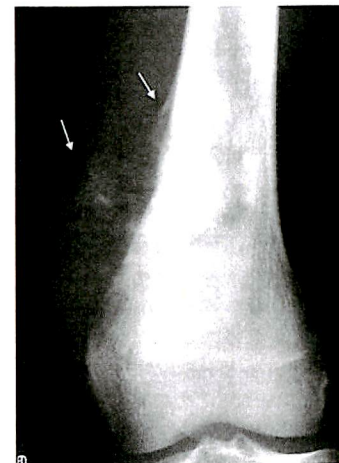
最も考えられるのはどれか。

- a 緑内障
- b 網膜剥離
- c 下垂体腺腫
- d 虚血性視神経症
- e 網膜静脈分枝閉塞症

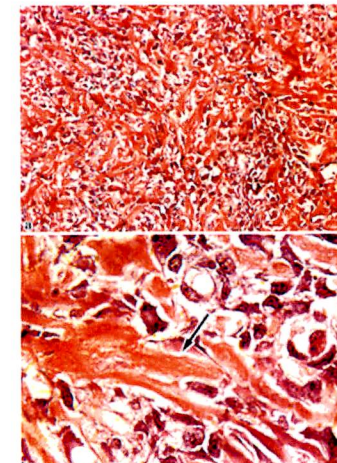
40 15歳の男子。右膝痛を主訴に来院した。2か月前に体育の授業中にジャンプした際に痛みを感じた。安静によって一時軽快したが、1週間前から痛みが再発し増悪傾向にある。既往歴・家族歴に特記すべきことはない。身長150cm、体重43kg。右膝関節可動域は正常である。LDH 344 IU/ℓ（基準 176～353）、ALP 1,824 IU/ℓ（基準 115～359）。初診時の右膝エックス線写真と大腿骨遠位部の骨生検H-E染色標本を示す。

対応として適切なのはどれか。

- a 経過観察
- b 持続洗浄
- c 病巣搔爬
- d 広範切除術
- e 関節固定術



右膝エックス線写真



大腿骨遠位部の骨生検H-E染色標本

- 41 42歳の男性。18歳時より自動車整備工場にて板金塗装業務に従事している。3か月前からの歩行時のふらつきを主訴に来院した。2週間前より悪心、嘔吐、倦怠感を自覚、1週間前から四肢末梢の感覚鈍麻が出現している。身長172cm、体重68kg。脈拍82/分、整。血圧142/90 mmHg。血液所見：赤血球440万、Hb 13.6 g/dl、白血球6,800、血小板22万。血液生化学所見：総蛋白7.2g/dl、アルブミン4.2g/dl、総ビリルビン0.9mg/dl、AST 64 IU/l、ALT 60 IU/l、LDH 388 IU/l（基準176～353）、 γ -GTP 86 IU/l（基準8～50）。

診断に有用な検査はどれか。

- a 尿中馬尿酸
- b 尿中コプロポルフィリン
- c 血清コリンエステラーゼ
- d 尿中 δ -アミノレブリン酸
- e 赤血球遊離プロトポルフィリン

- 42 38歳の男性。頭痛とふらつきを主訴に来院した。3年前から頭痛、易疲労感、口渇および物の見えにくさを自覚し、それらが徐々に増悪してきた。身長160cm、体重58kg。脈拍60回/分、整。血圧128/74 mmHg。両耳側半盲、記憶力低下を認める。尿所見：比重1.001、蛋白（－）、17-KS 0.5 mg/日（基準3～11）、17-OHCS 1.7mg/日（基準3～11）。頭部造影MRI T1強調像（冠状断）を示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 神経膠腫
- b 神経鞘腫
- c 胚細胞腫
- d 頭蓋咽頭腫
- e 海綿状血管腫



頭部造影MRI T1強調像（冠状断）

- 43 38歳の男性。胸部圧迫感を主訴に来院。8か月前の健診で160/90mmHgの高血圧と蛋白尿+を指摘されていた。1か月前から仕事が多忙で睡眠時間が4時間となっている。3日前から頭痛が持続し、本日主訴が出現した。

身長165cm、体重76kg。意識清明。血圧230/132mmHg。脈拍88/分、整。肺野に軽度のラ音を聴取する。心拡大（+）。大腿部以下に浮腫を認める。

尿所見：蛋白2+、潜血（±）。

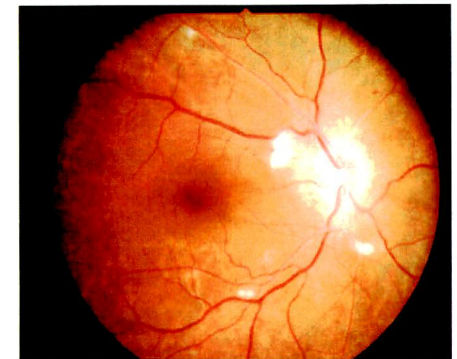
血液所見：白血球9,600、赤血球420万、Hb 13.6g/dl、血小板8万。

血液生化学所見：アルブミン3.6g/dl、尿素窒素38mg/dl、クレアチニン2.3mg/dl。

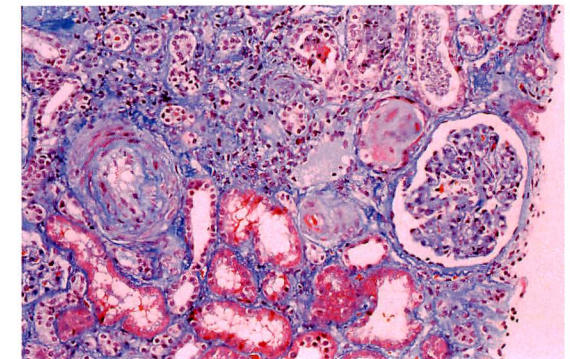
眼底写真を示す。腎生検光顕、マッソン染色標本（200倍）を示す。

正しいのはどれか。2つ選べ。

- a けいれん、意識障害に進展する。
- b 肝不全に進展する。
- c 破碎赤血球がみられる。
- d β 遮断薬を静注する。
- e 腎機能が回復することはない。



眼底写真

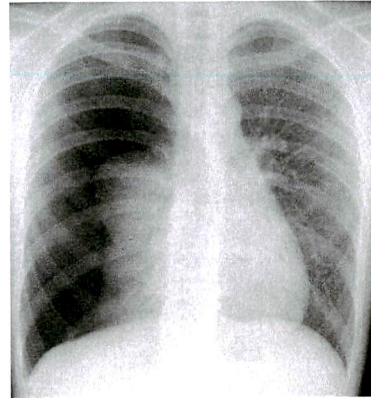


腎生検光顕、マッソン染色標本（200倍）

- 44 18歳の男子。ジョギング中突然の右胸痛と呼吸困難にて来院した。右胸部は打診で鼓音を呈し、呼吸音を聴取できない。来院時の胸部エックス線写真を示す。

直ちに行うべき治療はどれか。

- a 肺切除術
- b 気管内挿管
- c 血栓溶解療法
- d 気管支動脈塞栓術
- e 胸腔ドレナージ



胸部エックス線写真

- 45 23歳の男性。3週間前から右眼充血、眼脂、流涙が出現した。近くの眼科で急性結膜炎と診断され、点眼薬治療を受けたが、症状が改善しないため受診した。右眼の眼瞼結膜、球結膜に充血がみられ、下眼瞼凹蓋部に大型の濾胞が多数みられた。患側の耳前リンパ節の腫脹、圧痛もあり。下眼瞼結膜からの擦過標本にて、細胞質内に封入体を認めた。

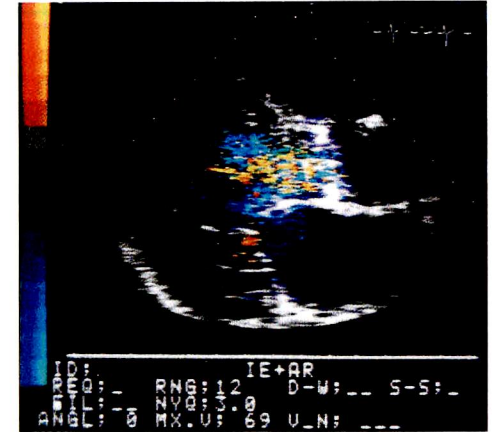
最も考えられるのはどれか。

- a 細菌性結膜炎
- b 流行性角結膜炎
- c クラミジア結膜炎
- d アレルギー性結膜炎
- e 単純ヘルペス結膜炎

- 46 60歳の男性。胸痛と息切れを主訴に来院した。約6か月前からめまいと前胸部の圧迫感を自覚していた。身長170cm、体重69kg。脈拍82/分、整。血圧170/30mmHg。胸骨左縁第4肋間に拡張期雑音を聴取する。呼吸音は正常でラ音を認めない。カラードプラー心エコー図を示す。

本症例で認められると考えられる聴診所見はどれか。

- a I音亢進
- b 僧帽弁開放音
- c 収縮中期クリック
- d 心膜摩擦音
- e 高調性全拡張期雑音

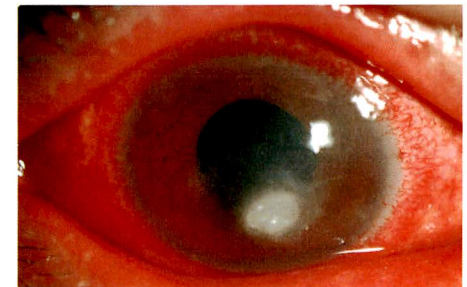


カラードプラー心エコー図

- 47 40歳の女性。左眼の充血、疼痛を主訴に来院した。普段2週間の使い捨てコンタクトレンズを装用しているが、痛みのため昨日からしていない。左眼視力は矯正で0.2と低下していた。左眼の前眼部写真を示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 乾燥
- b 細菌
- c アレルギー
- d ヘルペスウイルス
- e 若年性関節リウマチ



左眼の前眼部写真

- 48 4歳の女児。左耳痛を主訴に来院した。2日前より飲水時に左口角から水が漏れるようになった。水痘の予防接種は2歳時に受けている。左耳介と顔面の所見を示す。

誤っているのはどれか。

- a 左額のしわ寄せは可能である。
- b 左アブミ骨筋反射の減弱がみられる。
- c 左の感音難聴がみられる。
- d 眼振を認める。
- e 水痘・带状疱疹ヘルペスウイルスの再活性化が原因である。



左耳介の所見

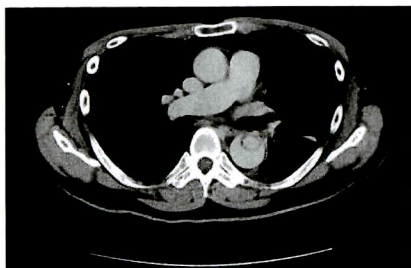


顔面の所見

- 49 62歳の男性。高血圧の内服治療中であった。突然激しい背部痛が出現し、持続するため救急車にて救命センターを受診した。来院時、血圧196/102 mmHg。心拍数98/分、整。意識は清明であった。胸部造影CTを示す。

すぐに投与すべき薬剤はどれか。2つ選べ。

- a モルヒネ
- b ヘパリン
- c β 遮断薬
- d アトロピン
- e 副腎皮質ステロイド



胸部造影CT

- 50 73歳の女性。3年ほど前から、ものの置き場所を忘れたり、同じことを何度聞いても忘れてしまうといったものが目立つようになっていた。3か月前には、近くに買い物に行って迷子になり、近所の人に家まで連れてきてもらった。歩行も歩幅が狭くなり、ときに転倒してしまうこともあった。1か月前から、「家の中に知らない子供がいる」「男の子も女の子も見える」といったことを訴えるようになり、心配した長男に連れられ、精神科を受診した。診察時、静止時の手指振戦を認めた。頭部MRIでは、全体的な脳萎縮、SPECTでは後頭葉の血流低下を認めた。

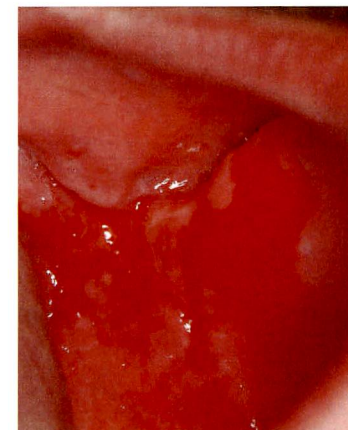
この症例の診断はどれか。

- a Pick病
- b 脳血管型認知症
- c 前頭側頭型認知症
- d Lewy小体型認知症
- e Alzheimer型認知症

- 51 50歳の女性。2か月前から口腔内粘膜疹、その後、体幹と四肢に径3 cmまでの水疱を伴う紅斑が出現したため来院した。水疱内容液の細胞診（Tzanck試験）で棘融解細胞を認めた。水疱の病理組織H-E染色標本所見でも表皮細胞間が離れる棘融解像を認めた。口腔内写真を示す。

最も考えられる疾患はどれか。

- a 尋常性天疱瘡
- b 疱疹状皮膚炎
- c 水疱性類天疱瘡
- d 後天性表皮水疱症
- e 晩発性皮膚ポルフィリン症



口腔内写真

- 52 58歳の男性。主訴：腹痛。3 か月前より腹痛が出現し、徐々に増強してきたため、外来を受診した。嘔気、食欲低下あり。

タバコ：10本/日、酒、ビール 350ml/日

意識：清明、血圧：140mmHg、脈拍：88/分、体温：37.6℃

WBC 7,700、RBC 366万、Hb13.5g/dℓ、PLT 25万

T. Bil 3.0mg/dℓ、D. Bil 2.2mg/dℓ、GOT 40 IU/ℓ、GPT 44 IU/ℓ

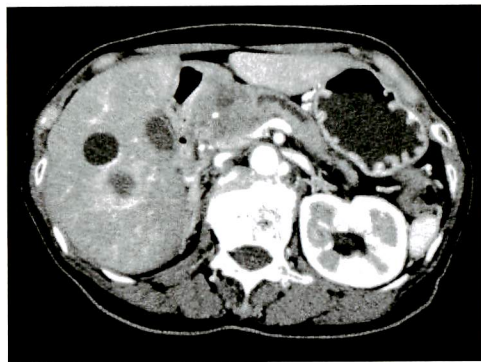
Alp 255 IU/ℓ、 γ GTP 70 IU/ℓ、Glu 110 g/dℓ、Amyl 118 IU/ℓ

CA19-9 335 IU/ℓ、CEA 8.1 ng/dℓ

造影CTを示す。

正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 肺炎が疑われる。
- b アルコール性が最も多い。
- c 胆石は、原因の一つである。
- d 根治手術症例は、約20%である。
- e Gemcitabineは、化学療法薬である。



造影CT

- 53 38歳の女性。3 か月前からの全身倦怠感を主訴に来院した。食欲低下と体重減少を認める。月経は5年前から過少である。30歳時の第2子出産時の出血量が多かった。意識は清明。身長162cm、体重45kg。体温35.2℃。脈拍56/分、整。血圧94/52mmHg。眼瞼結膜は貧血様であるが、眼球結膜に黄染は認めない。心音と呼吸音とに異常を認めない。尿所見：尿蛋白（－）、糖（－）。血液所見：赤血球320万、Hb 10.2 g/dℓ、Ht 32%、白血球 6,800、血小板18万。血清生化学所見：空腹時血糖 68mg/dℓ、HbA1c 4.3%（基準4.3～5.8）、総蛋白 6.4g/dℓ、アルブミン 3.2g/dℓ、尿素窒素 18mg/dℓ、クレアチニン 1.2mg/dℓ、総コレステロール 140mg/dℓ、トリグリセライド100mg/dℓ、Na128mEq/ℓ、K 5.4 mEq/ℓ、Cl 92 mEq/ℓ、Ca 9.2mg/dℓ、P 3.0mg/dℓ、TSH 0.15 μ U/ml（基準0.2～4.0）、LH 0.5 mIU/ml（基準1.8～7.6）、ACTH 5 pg/ml（基準7～60）、FSH 2.5 mIU/ml（基準5.2～14.4）、FT₃ 2.0 pg/ml（基準2.5～4.5）、FT₄ 0.72 ng/dℓ（基準0.8～2.2）、コルチゾール 4.8 μ g/dℓ（基準5.2～12.6）。

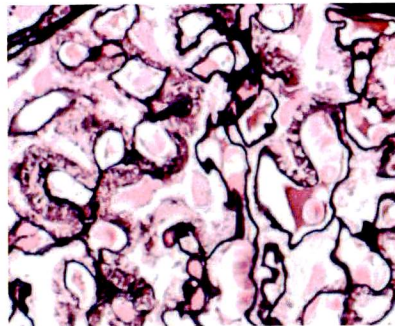
最初に投与すべきものはどれか。

- a 鉄 剤
- b 甲状腺ホルモン
- c 塩化ナトリウム
- d 性腺刺激ホルモン
- e 副腎皮質ステロイド

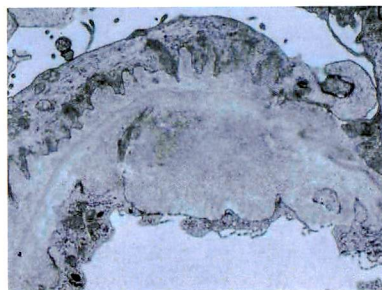
54 68歳の男性。労作時の息切れを主訴に来院した。1か月前より下肢のむくみを自覚。1週間前より労作時の息切れを認めた。来院時、血圧100/56mmHg。脈拍108/分。体温37.2℃。両下肺野に湿性ラ音を聴取。心尖部で収縮期雑音聴取、肝1横指触知、両下腿に浮腫あり。尿所見：蛋白（－）、潜血（－）、糖（－）、ベンスジョーンズ蛋白陽性。血液生化学所見：総蛋白 5.4g/dℓ、アルブミン 2.3g/dℓ、尿素窒素 30mg/dℓ、クレアチニン1.5mg/dℓ。腹部超音波所見では両側腎の腫大を認めた。腎生検PAM染色標本と糸球体電子顕微鏡標本を示す。

診断はどれか。

- a ループス腎炎
- b 紫斑病性腎炎
- c 糖尿病性腎症
- d 顕微鏡的多発血管炎
- e 腎アミロイドーシス



腎生検PAM染色標本



糸球体電子顕微鏡標本

55 30歳の男性。乾性咳嗽、呼吸困難を主訴に来院した。咳は約1か月前からで、特にここ数週間で労作時呼吸困難が強くなった。意識は清明。身長178cm、体重54kg。体温37.8℃。脈拍104/分、整。血圧110/70mmHg。白血球13,200（桿状核好中球7%、分核好中球78%、好酸球3%、好塩基球1%、単球8%、リンパ球3%）、血小板18万。免疫学所見：多クローン性高ガンマグロブリン血症を認めた。CRP 6.8 mg/dℓ。Tリンパ球 CD4/8比0.2（基準0.6～2.9）、 β -D-グルカン384 pg/ml（基準20以下）、寒冷凝集素陰性。動脈血ガス分析（自発呼吸、room air）：pH 7.42、PaO₂ 45 Torr、PaCO₂ 33 Torr。

原因病原体として最も可能性の高いのはどれか。

- a 肺炎球菌
- b 緑色連鎖球菌
- c サイトメガロウイルス
- d ニューモシスティス・ジロベシ
- e ヒトヘルペスウイルス8（HHV8）

56 15歳の女子。健診で肥満を指摘された。身長156cm、体重75kg。血液検査で、空腹時血糖 350mg/dℓ、トリグリセリド 287mg/dℓ、総コレステロール 120mg/dℓ、AST 80 IU/ℓ、ALT 122 IU/ℓ、 γ -GTP 120 mg/dℓ（基準8～50）、総蛋白 7.2g/dℓ、アルブミン 4.5g/dℓ、総ビリルビン 0.7mg/dℓ、抗核抗体 <40（基準40以下）であった。

最も考えられる肝疾患はどれか。

- a 肝硬変
- b 肝線維症
- c 自己免疫性肝炎
- d 原発性硬化性胆管炎
- e 非アルコール性脂肪肝炎

57 生後3週の新生児。3日前から股関節を動かすとき、特におむつを交換すると号泣することに気づき来院した。体温37.8℃。右股関節の可動域制限と軽度の腫脹が認められる。

エックス線所見で誤っているのはどれか。2つ選べ。

- a 亜脱臼
- b 白蓋骨硬化
- c 軟部組織腫脹
- d 骨端核の変形
- e 大腿骨頸部の骨破壊

58 23歳の女性。小学生時に心室中隔欠損症の診断を受けたが、短絡量が少なく治療の必要性はないと言われ、運動制限なく生活していた。結婚・妊娠前に検査を受けたいとの希望で来院した。心臓超音波検査では、筋性中隔に左右短絡5%以下の心室中隔欠損孔を認めたが、他の異常は認めなかった。

今後注意を促すべき心疾患はどれか。

- a Eisenmenger症候群
- b 感染性心内膜炎
- c 三尖弁閉鎖不全症
- d 僧帽弁閉鎖不全症
- e 大動脈弁閉鎖不全症

59 23歳の女性。電車に乗っていたときに、急に息苦しくなったが、駅に到着した際に症状が消失した。その後、「また電車に乗ると呼吸が苦しくなるのではないか」と思うようになった。数日後に、同じ電車に乗ったときに再び呼吸が頻回となったために、次の駅で降りてベンチで休んだが、息苦しさは改善しなかった。呼吸はさらに頻回となり、発汗、手足のしびれも出現した。救急車で救急外来を受診したが、息苦しさは救急車に乗っている間に改善していった。血液検査、心電図、胸部エックス線検査では、特に異常は指摘できなかった。

この症例にみられるのはどれか。

- a 心気症状
- b 転換症状
- c 予期不安
- d 強迫観念
- e フラッシュバック現象

60 44歳の男性。農業に従事している。1か月前より手背に淡紅色の弾性軟の結節が出現した。スボロトリキン反応陽性。

適切な治療はどれか。

- a 抗真菌薬内服
- b 免疫抑制薬外用
- c 外用PUVA療法
- d 活性型ビタミンD3薬外用
- e 副腎皮質ステロイド薬内服